

基幹共同研究 2

地域統合情報発信班の活動報告

I 概況：

基幹研究，地域統合情報発信班は，21世紀COEプログラム事業を継承し，只見町と連携を取りながら只見町インターネット・エコミュージアムのコンテンツの内容充実とその発信法を，①只見町の俯瞰写真 ②自然と暮らし ③只見町の屋根葺職人 ④只見町所蔵民具検索 の4分野に分けて進めてきた。生業，年中行事から民具まで，実際，盛時を再現して高精細映像で撮りためた資料の活用や，ウェブ上での特別展ともいえる屋根葺職人に続く個別テーマの番組化，民具のクロス検索のシステム開発など取り組むべき課題はさまざまである。その一方，豊かな自然と民俗文化を有する只見の地も少子高齢化の波に洗われ，民具を制作・使用した住民自身が収集し，整理し，記録カードに書き込む只見方式と民具学界で知られる民具の整理・記録・保存運動に従事した古老たちも多くが鬼籍に入られた。「孫に伝える」ということがその活動のモチベーションになっていたが，その子供たちの声も村里では聞えなくなっている。このような現状の中で，われわれの目指しているインターネット・エコミュージアムのシステム開発を進める意味を再度，確認し，持続可能なモデルとして「3つのミュージアム」構想を提示した。

II 活動内容：

- ①只見町インターネット・エコミュージアム入力用コンテンツ内容及びウェブ上での配信に関する諸問題について → 各民具と民具作業工程表を有機的に組み合わせ，ウェブ上に更新，アップした。
- ②民具カードのデータ化，デジタル化について → 予算の範囲内で，小野コンテンツと協議し，高精細画像の入力に取り組んだ。
- ③活動の対外公開について → 学会などを利用して，只見町インターネット・エコミュージアムの紹介に務めた。
- ④報告書の執筆 → 後期の研究会で，第一期の総括を踏まえたうえで，佐野賢治，木下宏揚が連名で年報報告する。

III 調査研究成果：

①研究会・学会発表

2010年7月16日 東京大学 文化資源学会

フレデリック・ルシーニュ 小松大介

「文化財の情報発信——只見町インターネット・エコミュージアムを事例に——」

2010年7月23日 非文字資料研究センター

佐野賢治「只見町インターネット・エコミュージアムの運営」

フレデリック・ルシーニュ「民具作業工程表の扱いについて」

小松大介「只見町民具分類の基準について」

2010年10月4日 只見町町民センター

佐野賢治「只見町インターネット・エコミュージアムの意義」

②報告

フレデリック・ルシーニュ「道具の記憶」『広報・ただみ』483号(2010.8.10)～487号(2011.1.10) *全6回にわたって月刊で連載。

佐野賢治「“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの役割」『非文字資料研究』24 2010.12

③年報報告(本号)

「民具」mingu は日本で生まれた学術用語であるが、この地球上において大多数を占める文字記録を残さなかった地域、階層の人々の生活文化を解明するのに有形の物質文化であるだけに第一級の非文字資料といえる。しかし、学術資料化の大前提になる学名1つとっても、それぞれの土地の住民の自然観や世界観が反映し、時代性、階層性、民族性などの属性も加わり、さらに近代化の中での位置づけも問われ、グローバルな共通名称の設定にはさまざまな課題が立ちはだかる。

そのために、年報報告では、

I 民具名称の標準化に向けての作業手順 各地の方言名称の入力、民具の名称の成り立ちの具体例として、只見町民具調査整理方式における作業工程表で紹介。

II オリジナルオントロジーを用いた民具のデータベース化で、オントロジー理論に基づいた検索法の活用と、鍵となる言葉の設定を考え、民具データベースにオントロジーを導入することによる有効性を提示。

III 3つのミュージアムで、只見町の博物館を、aミュージアム 性格〈施設における実物展示・保存〉一目的〈展示・保存(保全機関的)〉一訪問者〈特定できる参観者〉、bエコミュージアム 性格〈住民主体の地域認識・振興運動〉一目的〈教育(学校的)〉一訪問者〈地域の住民〉、cインターネット・エコミュージアム 性格〈地域情報のデータベース・公開〉一目的〈研究(研究所的)〉一訪問者〈不特定な多数者〉の3つの特徴から捉え、パソコン上のインターネット・エコミュージアムは、全世界と瞬時に結ばれ、大容量のデータを記憶し、検索すれば直ちに望むデータが引き出せることを提示した。

④只見町民俗資料館建設が確定

2010年12月の只見町議会において、国指定民具をはじめ、旧朝日町公民館所蔵の民具類を中心に、只見町の民俗資料館を旧只見町中学校舎を改修して、設立することが決定した。これにより、本プロジェクトにおける、aミュージアムが実現することになった。

IV 学術方面の国際化：

日本民具学会第35回大会（2010年10月30, 31日, 川越市民会館）公開シンポジウム「民具のデータベース化の現状と課題」において基調講演者・神野善治武蔵野美術大学教授は、特に只見町インターネット・エコミュージアムについて言及し、今後の民具研究の指針となるモデルとして紹介した。2010年12月、神奈川大学で開催された国際常民文化研究機構国際シンポジウムにおいて、佐々木長生福島県立博物館専門学芸員が只見方式の民具分類、国際標準名化について報告、紹介を行った。国際的には、中国民俗学会公式ウェブ上で、周星理事が民具研究の意味と実際について10頁にわたり紹介。学術交流先、北京師範大学では、民具関係で修士論文・博士論文を書くものが4名あられ、そのうちの一人は、只見町の民具調査研究、データベース化を対象にした論文を提出、フランス高等研究院、フランソア・シゴ氏は、只見町の民具調査・研究方式をフランス関係学会で紹介。只見方式の民具のデータベース化、公開法が国内・外で注目を浴びるようになった。

（佐野賢治）